

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月27日現在

機関番号：15501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2012

課題番号：21720288

研究課題名（和文）日本の民俗例にみる大物づくりの考古学的研究

研究課題名（英文）Archaeological study of making big pot seen in the example of folk customs in Japan

研究代表者

田畑 直彦 (TABATA NAOHIKO)

山口大学・大学情報機構・助教

研究者番号：20284234

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本の大物づくりの民俗例（越前焼・常滑焼・石見焼・堀越焼・唐津焼・薩摩焼・壺屋焼）を聞き取り調査、映像撮影、製品の観察等によって調査し、成形技術を中心に各焼物の技術的特徴・系譜を整理した。また、上記の調査から大物づくりに欠かせない普遍的な技術をまとめ、遺物を観察する上で新たな視点を提示した。

研究成果の概要（英文）：This research project investigated the production of big pot seen in the example of folk customs in Japan (Echizen ware, Tokoname ware, Iwami ware, Horikoshi ware, Karatsu ware, Satsuma Ware, and Tsuboya ware) by an interview, image photography, observation of a product, etc. and arranged the technical feature and genealogy of each Ware focusing on molding technique. I summarizes the technology universal which is indispensable to making big pot from the above study. And presented a new perspective on observe relics.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	400,000	120,000	520,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	1100000	330000	1430000
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、考古学

キーワード：民俗例・大物

1. 研究開始当初の背景

私は、本研究に関する学術的背景として3点の問題点があると考えた。

1 点目は大物がかつて盛んに生産していた産地はどれも危機的状況にあることである。

私は、弥生土器の製作技術を考察する関係で、日本の民俗例についてどのように粘土紐を積み上げて成形を行っているのかを考察

する機会があった（田畑直彦「佐野焼の「荒物」づくり—人間轆轤と叩き技法—」山口考古第28号）。上記に関連して、各地の窯（常滑焼、唐津焼、薩摩焼、壺屋焼、石見焼、大谷焼、堀越焼）で製作の一部を見せていただき、聞き取り調査を行った結果、下記の点が明らかとなった。

(1) 現在、大物づくりの技術の伝承者は極

めて少ない。特に各産地の本来の姿をとどめていた高度成長期以前の製作状況を知る技術伝承者はどの窯でも数名以下である。

(2) 大物づくりの後継者が極めて少ない。後継者がいる場合でも、電動轆轤の使用が一般化するなどの変化がみられる。

(3) どの窯においても大物の需要が極めて少く、小物、芸術的作品の生産が主体である。大物の製作には手間がかかるため高価であり、無料で研究のためだけに製作していただくことができない。

2 点目は大物づくりについて考古学的視点から比較・検討があまり行われていないことである。

日本の民俗例における大物づくりを考古学的視点から詳細に検討した研究として、第一にあげられるのが横山浩一氏の研究である(横山浩一 1982「佐賀県横枕における大甕の成形技術—現存する叩き技法の調査」『九州文化史研究所紀要』第 27 号)。他の産地については民俗学的な立場から述べられたものは多数ある。しかし、考古学の立場からは木立雅朗氏の研究(木立雅朗 2001「大甕造りの民俗事例と須恵器の大甕」『北陸古代土器研究』第 9 号)があるものの、大半は概要の紹介にとどまるものが多く、詳細な研究はほとんどない。

3 点目は、陶芸経験の少ない現代人が技法を理解するのに欠かせない映像資料があまり公開されていないことである。

上記の横山氏の論文は極めて詳細に書かれているが、実際に製作場面を目にしたことのない者にとっては理解が困難である。製作技術の詳細について理解を得るためには論文とともに映像資料を提示する必要がある。

2. 研究の目的

(1) 大物づくりにおける聞き取り調査・映像撮影により、各窯の技術的特徴を明らかにする。

(2) 各窯の技術的特徴から技術的系譜を整理する。

(3) 大物づくりに欠かせない、普遍的な技術を明らかにする。

(4) 1～3に基づき、実際の遺物を観察する上での新たな視点を提示する。

3. 研究の方法

平成 21 年度から 24 年度にかけて、日本の大物づくりの民俗例(越前焼・常滑焼・丹波焼・石見焼・堀越焼・佐野焼・唐津焼・薩摩焼・壺屋焼)について聞き取り調査、映像撮影を行う。

4. 研究成果

(1) 2009 年度

製作していただく窯元に製作依頼・打ち合わせのみを行う予定であったが、諸事情により先行して壺屋焼(沖縄県)の調査を行った。具体的には荒焼窯元・榮用窯の新垣榮用氏に 1 斗(約 18 リットル)人の壺(トウクイ)を製作していただき、その模様をビデオ撮影するなどして記録した。合わせて、同氏ならびにご子息の新垣栄氏から荒焼についての聞き取り調査を行い、調査終了後、映像・写真並びに製作工程を整理した。なお、壺屋焼物博物館からは荒焼き全般に関する多大なご教示をいただいた。調査の結果、荒焼の製作技法並びに道具等には唐津焼・薩摩焼とは異なる点が多々認められた。叩きに使用する道具の形態等については近似する点もあったが、使用方法・保管方法が異なっており、叩く回数も異なっていた。また、荒焼では唐津焼・薩摩焼にみられる内面専用のへらはなく、当て具もしくは手を使用するといった違いがあった。紙面の都合上、全て提示できないが、唐津焼と薩摩焼には共通点が多いのに対し、荒焼は異なる点が多く独自の特徴を持つことが改めて確認できた。これらの特徴については、近代以降の技法の変化なども考慮する必要があり慎重な検討が必要であるが、壺屋焼成立以前に存在した東南アジア系陶器の製作技術が反映している可能性がある。以上、実際に製作していただくことで、考古遺物や近代以降の伝世資料を観察する上でポイントとなる点が浮上してきた。このほか、次年度以降の調査準備のため、堀越窯(山口県防府市)、越前焼たいら窯(福井県越前町にて製作依頼・打ち合わせを行い、文献調査を行った。

(2) 2010 年度

平成 22 年 4 月に薩摩焼・佐太郎窯で薩摩焼の成形道具等の調査と聞き取り調査を行った。平成 22 年 6～8 月に堀越焼・堀越窯で二斗入り甕の製作を記録し、聞き取り調査を行った。また、堀越焼・祥山窯にて賀谷窯の関連資料を調査し、聞き取り調査を行った。平成 22 年 6 月に武蔵野美術大学図書館・美術館民俗資料室にて旧日本観光文化研究所収集コレクションのうち、佐野焼・堀越焼の製品や成形道具類について、写真撮影・採拓・実測を行った。平成 22 年 7 月に武雄古唐津系・多々良焼・金子窯で二斗入り甕の製作を記録し、聞き取り調査を行った。平成 22 年 11 月に石見焼・石州嶋田窯にて二斗入り甕の製作を記録し、聞き取り調査を行った。平成 22 年 11 月に壺屋焼・荒焼・榮用窯にて成形道具や製作の手順等について聞き取り調査を行うとともに、昨年度行った一斗壺製作の記録についてとりまとめ作業を行った。また、沖縄県那覇市立壺屋焼物博物館にて、

荒焼製品、轆轤の調査を行った。今年度調査した甕の製作技術は、蹴轆轤や火鍋の使用・叩き技法等を特徴とする朝鮮系の唐津焼・薩摩焼・壺屋焼(荒焼)と、蹴轆轤を使用するが、ヘラ等で成形を行う堀越焼・石見焼に大別される。ただし、前者・後者のグループ間においても成形手順、道具等には相違点があることを確認できた。また、堀越焼は成形後に一定時間乾燥させてから製作者が甕の周囲を回りながら叩いて形を整えることが知られていたが、今回の調査で叩き板を動かす手順にも独自の特徴があることが判明した。なお、今年度製作していただいた堀越焼・唐津焼・石見焼の甕は山口大学で購入して保管しているほか、記録した画像・映像はハードディスク等に保管し、報告書・DVD作成に備えた。

(3) 2011年度

平成23年5月に薩摩焼・佐太郎窯にて、薩摩焼甕の成形と成形道具について同窯の鮫島寿郎氏より、聞き取り調査を行った。薩摩焼の甕については、成形時に立ち会うことができなかつたので、鮫島氏に撮影していただいた各工程の写真に基づき、詳細についてご教示いただいた。また、同年8月に鹿児島県歴史資料センター黎明館にて、鮫島佐太郎氏寄贈写真について調査を行った。なお同年8月末に越前焼の大甕づくりの記録調査を行う予定であったが、大甕づくりを依頼していた藤田重良右エ門氏が8月3日に急逝された。このため、記録調査の実施を中止し、たいら窯、福井県陶芸館で関係者から聞き取り調査を行った。また、常滑民俗資料館にて、常滑焼の製品・成形道具・記録映像等について調査を行った。その他、調査資料の整理と文献調査を実施した。

(4) 2012年度

2012年7月に近世の甕をテーマとして開催された第163回九州古文化研究会で、「周防における近世大甕の製作技法について」と題して研究発表を行った。また、同研究会では上野・高取焼、唐津焼についての研究発表も行われ、発表者のほか、各地の研究者と意見交換・議論を行うことができた。発表のほか、同研究会では北九州市内から出土した近世の甕が展示され、上記同様、意見交換を行うことができた。

平成24年11月に下関市立豊北歴史民俗資料館で開催された企画展「器—形と技—」に合わせて開催された記念シンポジウムにて、「現在の大甕づくりと技術伝承—考古学の視点から—」と題した講演を行った。同シンポジウムでは無形の技術や郷土遺産の継承について、他のパネラーの方々や参加者と幅広い視点から意見交換を行うことができた。

平成24年12月に小石原焼・小鹿田焼について道具類、考古資料、窯跡、文献等の調査を行った。また、那覇市壺屋焼物館にて、壺

屋焼の研究の現状や課題について、調査を行った。

このほか、随時調査のとりまとめ作業を行った。具体的には工房や道具類等の記録を整理し、製作の様相を撮影したビデオ映像を繰り返し見て検討した上で、製作工程を文章と写真によりとりまとめ、製作工程の模式図を作成した。

平成25年3月に研究成果の一部として、『日本の民俗例にみる大物づくりの考古学的研究I—堀越焼—平成21～24年度日本学術振興会科学研究費補助金(若手研究(B))による研究成果』を刊行した。

(5) 大物づくりの系譜

現在の大甕づくりの系譜とは3つに大別することができる。

①中世から存続するもの

いわゆる中世六古窯などが代表的であるが、今回の対象では、佐野焼・常滑焼・越前焼が相当する。「人間轆轤」で成形を行うことを特徴とする。

②朝鮮系/近世初頭に成立したもの

近世初頭に成立したいわゆる朝鮮系の焼物。今回の対象では唐津焼、薩摩焼、壺屋焼が相当する。蹴轆轤を使用し、叩き技法を行うことが特徴とする。

③江戸時代後半に成立したもの

江戸時代の後半に成立した焼物。今回の対象では石見焼、堀越焼が相当する。蹴轆轤を使用するが、叩きを使わずにヘラで伸ばして成形することを特徴とする。また、粘土紐も唐津焼等よりはかなり太めである。

(6) 大物づくりにみられる普遍的な技術と遺物を観察する上での新視点

①成形の工程

現代の大物づくりでは、まず底部を作って半乾燥、つまり途中で乾かしながら何段階かに分けて成形を行うが、これは古くからみられる普遍的な手順である。また、現在の大物づくりでは成形途中に紐(唐津焼・石見焼)や布(常滑焼)を巻いて形が崩れないように工夫を行う。この点について、出土した土器を見て判断するのは極めて難しいが、痕跡が存在する可能性は十分にある。

②粘土紐の積み上げ方法

現在の大物づくりにみられる、粘土紐を掌に押し当てて延ばすと技法は、現段階で土器の観察から証明することはできない。しかし、この技法は太い粘土紐を延ばすのにきわめて有効であるため、存在した可能性は高い。今後、製作実験、科学的な分析によって解明する必要がある。

③叩き技法

弥生土器や須恵器は遺物の観察から叩いて作っていたことが判明しているが、具体的な手順は不明である。現在の大物づくりの叩きでは、叩き板と当て具を拍を打つように同

時に動かすが、これは東南アジアの民族例でもほぼ同じである。このような叩く際の動作の詳細は出土土器を観察する上で参考になる。また、叩きにも成形時に行う叩きと整形時に行う叩きがあるが、堀越焼にみられるように両者において叩き方が異なる場合があることも判明した。

今後、出土土器の叩き痕の切り合いを丹念に観察し、上記の事例と比較検討することが求められる。

④人間轆轤

轆轤が導入される以前、弥生時代の甕棺や須恵器の大甕などの成形には人間轆轤、つまり人間が土器の周囲を回って成形していたことは十分に想定される。というのも、人間轆轤は道具も設備もほとんど必要ないためである。しかし、現状では遺物の観察から判断することができないのが課題である。

⑤木のヘラ（ハケメ）の使用

現在の大物づくりに見られる木のヘラの使用法は、ハケメの目的・効果を知り、土器を観察する上で参考になる。

⑥大物づくりの特殊性

各地の窯元で聞き取り調査を行った結果、大物づくりの特殊性、すなわち大物を作るのは大変困難であること、製作者はほぼ男性に限定されていることが判明した。

また、大甕をつくる陶工も、若いときに小さい物を作ることから修行を始めて、だんだん大きい物をつくりことができるようになるが、大甕を作るのは非常に困難であるため、大甕づくりを志した人でも実際に大物を作ることができるようになるのはごく一部であることが分かった。

山口県の佐野焼の場合では、小さい物を製作する陶工を「小物師」、大物を製作する陶工を「荒物師」と呼んでいたが、これは他にも同様で、小物と大物を製作する陶工は区別されている。

弥生時代の甕棺は専門的で特別な技術を持った工人によって作られたと考えられている。甕棺や須恵器の大甕など、大型土器を具体的にどのように成形されたのかを検討する上で、現在でも大型土器を作るのは非常に難しいという事実は重要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①田畑直彦、現在の大甕づくりと技術伝承—考古学の視点から—、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要、査読無し、第8号、2013、75-82

②田畑直彦、外傾接合と弥生土器、山口大学

考古学論集、査読無し、2012、77-102

③田畑直彦、現在の大甕づくりと弥生土器、下関市立考古博物館研究紀要、査読無し、第15号、2011、1-14

[学会発表] (計2件)

①田畑直彦、九州・沖縄における壺・甕の成形技術—唐津焼・薩摩焼・壺屋焼における民俗事例の検討—、日本考古学協会第79回(2013年度)総会、2013.5.28 駒澤大学(東京都)

②田畑直彦、周防における近世大甕の製作技法について、九州古文化研究会163回例会、2012.7.22 北九州埋蔵文化財センター(北九州市)

[図書] (計1件)

①田畑直彦、日本の民俗例にみる大物づくりの考古学的研究I—堀越焼—平成21～24年度日本学術振興会科学研究費補助金(若手研究(B)による研究成果、2013、1-63、山口大学埋蔵文化財資料館

[その他]

講演

①田畑直彦、現在の大甕づくりと技術伝承—考古学の視点から—、2012.11.17 下関市立豊北歴史民俗資料館(下関市)

②田畑直彦、弥生土器からみた土井ヶ浜甕生人、2010.5.15 下関市立考古博物館(下関市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田畑 直彦 (TABATA NAOHIKO)
山口大学・大学情報機構・助教
研究者番号：20284234

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：